

目次

ボランティアについて
いっしょに
考えてみよう。



はじめに 西尾雄志	4
-----------	---

ボランティアの現場から 中国ハンセン病快復村でのボランティア活動 「家-JIA-」 原田僚太郎さん	6
---	---

第1章 ボランティアって人助けなの？

わたしたちが人助けする理由を考えてみる	12
古代の思想家・孟子も同じ疑問をもっていた	14
遠くの人と目の前の人は 人間にとってどうちがう？	18

第2章 ボランティアの原則

ボランティアの3原則 「自発性」「公共性」「非営利性」	22
ボランティアはほんとうに3原則を満たしているの？	24

第3章 ボランティアにひそむワナ

だれにとっての「いいこと」なのか	30
------------------	----

第4章 ボランティアを育てるカギ

話し合いによってよりよい結論をみちびく	36
みんなの知恵を集めるファシリテーション	38

第5章 ボランティアがもたらすもの

社会のしくみとボランティア	42
ボランティアを通じて出会うということ	44
さくいん	47

ボランティアとSDGs

2015年9月25日の国連サミットで、地球環境を保全しながら発展をつづけるための目標「持続可能な開発目標 (SDGs)」が採択されました。SDGs は、2016 年から2030 年の15 年間で国連加盟国が達成すべき17 の目標 (ゴール) と169 のターゲット (ゴールにいたるための具体的な課題) で構成されています。17 の目標は、国だけでなく企業や市民が参加し、社会全体で達成をめざすものとされています。

本書では、ボランティアの活動をSDGs の観点からとらえ、SDGs のどの目標にかかわるかを右のマークでしめしています。



ボランティアの3原則 「自発性」「公共性」「非営利性」

みなさんはボランティア活動という、どんなものを思いうかべるでしょうか。福祉ボランティア、海外協力ボランティア、環境ボランティア、介護ボランティア、災害ボランティア、ごみ拾いボランティア……数えあげればキリがありません。内容は多種多様ですが、ボランティアは3つの原則を満たすものとされています。その3原則とは「自発性」「公共性」「非営利性」です。

ボランティアの3原則の意味を考えよう。



3原則をもとに、ボランティアのあるべきがたを考える

ボランティアの3原則「自発性」「公共性」「非営利性」について、その意味を確認しましょう。とりあえず現代の日本では、この3つのすべてを満たしている活動が、ボランティアといえることになります。

1 自発性 だれかに命令されるのではなく、自分から進んで行う。



本の点字翻訳をする。

義務ではなく、自分から「やってみたい」と思う気持ちがボランティアの原点です。「こんな助けが必要なのでは？」と思いつき、世の中にまだない活動のスタイルやしくみをみずから考えてはじめる人もいます。

2 公共性 家族や身近な人のためではなく、広くみんなのためになる。



歩道の花壇の世話をする。

親しい人に親切にするのとはちがい、ボランティアが対象とするのは不特定多数の人たちです。社会を構成する一員として、社会の役にたち、みんながゆたかにくらするようになさる活動です。

3 非営利性 仕事でやっているのではない。 お金もうけではない。



被災地で土砂やがれきをかたづける。

ボランティアは、社会に参加したい、人を助けたいという思いからはじまるもので、活動に対して報酬をもとめません。お金もうけや利益を目的とすることはありません（→25ページ）。

? アイデアをもちよう

ボランティア活動を行ううえで重要なのはどんなことか、それぞれに考えてみましょう。「自発性」「公共性」「非営利性」について、またそのほかに大切にすべきことがあるとしたら何でしょうか。

3つの原則に反しないよう注意して、考えてみましょう。



公共

英語の public を訳したことは。私的なこと (private) に対して、社会一般や公のこと、社会に参加する人みんなが広く共有するものなどをさす。



営利

財産やお金をふやし、利益を得ようとする。お金もうけ。

新たな発想で活動する「先駆性」や、活動が長つづきする「継続性」を原則に加える考えかたもあります。



外来生物を防除し、 日本本来の生物多様性をまもる

せいたいこうぼう
生態工房

人間の活動によって、本来すんでいない地域に移動させられた生きものを外来生物といいます。外来生物がふえると地域に昔からいた在来種と、えさやすむ場所を確保するための競争が起き、生態系はこわされ、本来の生物多様性が失われていきます。公園の池や城の堀などでも、外来生物は大きな問題となっています。外来生物を駆除することで、本来の生物多様性をとりもどす活動が行われています。

外来生物って
人間がもちこんだ
ものなんだね。



自然をとりもどした公園をめざす

「生態工房」は、1998年、5人の大学院生たちによって設立された団体です。当時5人の学生たちは、東京都練馬区の都立光が丘公園にある野鳥保護区のボランティアをしていました。そこで自然が保護されているはずの野鳥保護区でさえ外来生物がたくさんいることに問題を感じ、なんとか在来種がいたもとの自然環境にもどすことができないかと思ったのが設立のきっかけです。

最初はNPO法人ではなく、仲間どうしが集まる任意団体としてのスタートでした。スタート当初は、外来生物の駆除方法などもわからなかったのですが、本から情報を得たり、学会や研究会に参加したりして、問題になっている外来生物、たとえばブラックバスやアカミミガメ、セイタカアワダチソウなどの生態を学び、外来生物の駆除活動を行いました。

活動をはじめて3年で野鳥保護区内の池にいたブラックバスを完全に駆除するなど、光

が丘公園で多くの成果を上げていった結果、生態工房の活動が広く知られるようになりました。そして、東京都の都立公園を管理する東京都公園協会からの依頼で、外来生物の問題に頭をなやませていたほかの公園でも外来生物の駆除を行うようになり、活動の場が広がっていきました。

生態工房は、2010年に認定NPO法人となつて、いまにつづいています。



外来生物捕獲用のわなを修理するのも生態工房のメンバーの仕事です。

駆除するだけでなく 多くの人に問題点を伝えることが大事

生態工房は、東京都立の公園などから業務をうけおうかたちで、外来生物の防除活動を行っています。その活動には大きく分けて二つあります。

一つは、外来生物であるアカミミガメやザリガニの駆除です。駆除は、わなを使って生けどるという方法を用います。わなは市販のものを使うこともありますが、その地域に合ったわなでないと、うまくつかまえることができない場合もあるので、おもに生態工房で手づくりしたものを使っています。

アカミミガメの駆除は、生態工房の設立当初からずっと行っていた活動です。当時からアカミミガメの駆除には大きな問題がありました。それは、人びとのカメに対する認識です。日本では、カメはペットというイメージが強いので、外来生物だからといって、駆除することにはどうしても心理的な抵抗が強く、苦情の声もあったといいます。とはいえ、アカミミガメは大食漢です。池で数多く繁殖してしまうと、水草を食べつくすばかりか、ときにはカルガモのヒナまで食べてカルガモの一家を全滅させてしまうこともあります。

生態工房では、ただアカミミガメを駆除す



アカミミガメ

本来アメリカの中南部の淡水に生息するカメ。日本ではミドリガメとして、子どものカメがペットショップなどで売られている。最大で30センチ近くまで成長するため、飼いきれなくなつて、池や堀などにすてられ、繁殖して問題になっている。



事務局長の佐藤方博さんに 聞きました



外来生物など、自然環境のなかで問題になっていることはいくつもあります。こうした問題に関心を持ちながらも、どうすればいいかわからず、残念な気持ちをかかえて眺めているしかないという人も多いと思います。ですが、アカミミガメの駆除がそうだったように、解決できる方法はきっとあります。自分に何ができるかを考えたり、情報を集めたりしてみてください。きっとどんな活動をすればいいかの答えは見つかるはずです。



団体データ

団体名称	認定NPO法人 生態工房
設立	1998年(2002年にNPO法人化)
所在地	東京都武蔵野市吉祥寺本町 4-9-22 フラットK101
電話	0422-27-5634
ファクス	0422-27-5634
メール	eco@eco-works.gr.jp
ホームページ	https://eco-works.gr.jp/

ひ さい ち きん きゅう し えん

被災地への緊急支援を顔の見えるつながりで行う

オ ー プ ン ジ ャ パ ン

OPEN JAPAN

災害の復旧活動は、被災地の人たちだけではできません。現地の行政や社会福祉協議会などの組織を中心に、全国からかけつけた個人や団体、企業などがボランティアとして協力し、必要とされる支援を行うことで、少しずつ復旧の方向へと動いていきます。OPEN JAPANは個人や組織による横のつながりを全国にもつボランティア団体として、被災者といっしょに災害支援を行っています。

人や組織どうしの
つながりをつくって
支援しているんだね。



だんたい

団体データ

団体名称	一般社団法人 OPEN JAPAN
設立	2012年
所在地	宮城県石巻市駅前北通り 1-5-23
電話番号	0225-92-7820
ファクス	0225-92-7820
メール	info@openjapan.net
ホームページ	http://openjapan.net

一つ屋根の下での活動が原点

OPEN JAPANの活動の原点は、1995年の阪神・淡路大震災のときに生まれた支援団体「神戸元気村」です。2011年の東日本大震災直後に、その仲間たちが宮城県石巻市に結集し、そこで出会った2人が「ボランティア支援ベース絆」を立ちあげました。

支援活動の拠点（ベース）として石巻市内の集会所を借りあげ、一つ屋根の下で食事やねとまりをともにしながら、朝になるとそれぞれの活動現場に出むきました。夕方、ベースにもどってくると、その日の活動内容や

こまっていることなどを報告しあい、それをするときには被災者をふくむ人たちみんなで共有し、解決のためのアイデアを出しあう。これをくりかえしたのです。そこではおたがいの泣いた顔、おこった顔、こまった顔、笑った顔など、さまざまな顔が見られ、「明日のくらしを少しでもよくしていきたい」という思いで、さまざまなところから集まってきた人たちが真剣に向きあうすがたがありました。

その後、東日本大震災からまる1年がたった2012年3月を機に、OPEN JAPANとして再出発しました。この名前は「開け！ ニッポン」という意味で、日本を切りひらいていくという願いがこめられています。

たいざい

長期滞在して、いまここに 必要な支援を行う

日本各地には多くの災害復旧支援のボランティア団体がありますが、OPEN JAPANの特徴は、現地に自分たちの活動拠点をもうけたうえで、ボランティアの仲間たち（個人や組織）が必要におうじてプロジェクトを組みながら、滞在型の支援を行っていることです。

たとえば、災害が起こると、1日～2日のうちにOPEN JAPANのスタッフが被災地に向かいます。1つの災害の被災地はふつう1か所ではありません。大事なのは、どの被災地に向かうかということです。OPEN JAPANの場合は、ボランティアが集まりにくそうなところ、交通の便の悪いところ、高齢者の多いところ、地域のももとのつながりが弱そうなところなどに出むくようにしているといいます。

被災地に着いたスタッフは、地元の行政や社会福祉協議会などの担当者から、被災状況や必要とされる支援内容を聞きとります。現地の人たちも突然の災害で何をしてよいかわからないことがあり、そんなときは応急的な対応をいっしょに考えたり、災害ボランティアセンターの開設や運営などを手伝います。また、復興活動を公的な費用で行うのか、被災者個人の費用で行うのかによっても支援のしかたが変わるので、国の災害支援制度を利用するかどうかなど、いくつもの方法を組みあわせるコーディネート力がもとめられます。



ひ だ ひろし

副代表の肥田 浩さんに
聞きました



東北出身、3月11日が誕生日ということもあり、東日本大震災のあと愛知県から宮城県に行きました。3日間の予定だったボランティアが、気がついたらOPEN JAPANに加わっていて、被災地から被災地へとつづいていく「住所不定の車中泊生活」がつづいています。災害ボランティア活動には不思議な力があり、自分たちがだれかに助けられると、こんどはそれをだれかにしてあげたくなる人が多いです。「過去から未来への恩送り」とでもいうのでしょうか。



必要におうじて、災害ボランティアセンターの会合にOPEN JAPANのスタッフが参加します。